た木を点検・検査・集積する文字通りの御役所で、藩政期から機能し、明治・大正及び昭和に入っても利用された所といいます。

「日本林制史調査史料」によると、延宝7年（1679）の記録として馬場目山地など内陸産の薪・杭・材木などがここに集散され、船越・久保田へ運ばれていました。この通りは、昔役所小路と呼ばれており、馬場目川は、この道のすぐ傍の下の方を蛇行していたと云われています。

“菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

木役所

一日市の水は飲み水に適していなかったため、上水道が完備されるまでは大川の木役所の井戸まで水を汲みに行っていた。中羽立にも飲み水の井戸があったが一日市の者はほとんど木役所に行っていたと思う。一日市の水は金気が強く飲み水に適していなかった。冬、馬場目川の水が凍ると、氷を割って川水を飲み水にしていた。

年に一回、井戸を清掃する時があって、一日市からも手伝いに行っていた。井戸を維持するための負担金を払っていた人もいたように思う。

1999年　前一日市郵便局長畠山謙治談

くぼみ【久保見（くぼみ）】

「クボ」は窪の意。

1987年三浦鉄郎著 新編･秋田の地名

くわのき【小池桑ノ木（くわのき）】

草木の名称は近くに名の由来となった草木があったために命名された場合と当て字で付いた場合、縁起を担いで付けた場合がある。

1987年三浦鉄郎著 新編･秋田の地名

こいかわ【琴丘町鯉川（こいかわ）】

八郎潟の東北部に注ぐ鯉川川（近世には市野川と称す）の流域一帯を中心とし、湖岸部の台地裾野2か所から縄文晩期の遺物が出土する。地名は八郎潟の鯉漁の地であったことに由来すると伝えられる（町郷土誌）。

〔中世〕鯉川村。戦国期に見える村名。出羽国檜山郡のうち。口碑ではもと添川村と称したというが、未詳。史料上の初見は、天正19年正月17日豊臣秀吉が秋田実李の当知行を安堵した朱印状写に「川尻村・こい川村」327石とある（秋田家文書）。並記の川尻村は湖岸低湿地開拓がまだ充分でなく、慶長8年にも村高77石余の地であるので、上述石高のうち250石前後が鯉川村分であったと推定できる。

〔近世〕鯉川村。江戸期～明治22年の村名。出羽国山本郡（寛文4年まで檜山郡）のうち。秋田藩領。慶長8年三倉鼻（みくらがはな）の拡幅工事による羽州街道整備に伴い、その伝馬役賦課などのため、中世末期の川代（かわだい）・市野･種沢の3か村（浜瀬・相野野（あいのの）・陣馬の3か村も含むか）を合併して新たに鯉川村を整備。当時の村高327石余と推定される。「正保国絵図」でも本田当高295石とある。その後、宝永4年頃に南半分を割いて天瀬川村が独立し、鯉川村は浜鯉川・川代・小谷野沢3か村を枝郷とする村に縮小。親郷鹿渡村の寄郷となる。「享保黒印高帳」では村高513石余・当高412石余（うち本田254・本田並93・新田65）、「寛政村附帳」では当高545石余（うち蔵分129・給分416）、「天保郷帳」は412石余。戸数は「享保郡邑記」で93軒（うち枝郷分65）、「秋田風土記」で148軒。潟漁も盛んであり、八郎潟漁業関係史料に村名と村の動向が多見。村鎮守は磯前神社。真言宗智山派日王山王蔵寺（久保田町宝鏡院末寺）のほかに修験官覚院がある。明治22年山本郡鹿渡村の大字となる。

〔近代〕鯉川。明治22年～現在の大字名。はじめ鹿渡村、昭和7年からは鹿渡町、昭和30年琴丘町の大字となる。